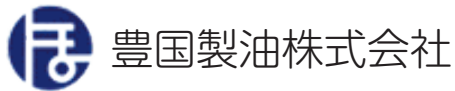


「植物油」で独自の道を切り開く

オンリーワンの技術で国内トップシェア

豊国製油 株式会社



豊国製油 株式会社

代表取締役社長：今川 博道 氏

本社：大阪府八尾市

設立：1951年（昭和26年）

従業員数：99名

事業内容：植物油脂、化成品およびヒマシ油とその誘導体の製造

「ヒマシ油」という植物油を主力製品として、ニッチな分野で高いシェアを誇る豊国製油株式会社。「油」と向き合い続け、2021年には創業70周年を迎えます。その製品は工業用をはじめ、ポリウレタン樹脂、接着剤、化粧品などの原料としてさまざまな用途で使用されています。今回は、同社の歴史から、社長としての取り組み、そしてこれからの展望について、代表取締役社長の今川博道氏にお話を伺いました。

— ニッチ分野への特化が独自の地位を築く

当社は1951年（昭和26年）に大阪市で創業しました。創業当初は菜種油や大豆油などの食用油を製造していました。現在の主力製品である「ヒマシ油」に特化しはじめたのは、八尾市に工場を新設してからです。その当時、八尾のあたりには同様の食用油を取り扱う企業が多く、競争が激化したことが大きな理由です。しかし当初はヒマシ油の市場規模も小さく、ニッチな分野だったため、「なぜヒマシ油なんて…」と同業者からは冷ややかな目で見られていたそうです。現在では、大手企業の大量生産によって国内の食用油業界の淘汰が進み、八尾にあった会社はほとんどなくなってしまいました。ヒマシ油へ特化していなければ、当社の今はなかったと思います。



創業当時の風景

— 無限の可能性を秘めるヒマシ油

ヒマシ油は用途が広く、化学反応に

よって多彩な物質に変化します。植物油で最大の粘度、比重を誇り、低温での高い流動性を持っているため、古くから多くの工業用原料に使用されてきました。さらに現在は、既存の用途にとどまらず、自動車、電子材料などに加え、今後さらに進化が加速するロボット市場も視野に入れ研究・開発を進めています。

環境意識が高まる昨今、環境への負担が少ないバイオマスへの注目度も高まっています。ヒマシ油は「トウゴマ」という種子が由来の天然資源です。そのため、資源の有効活用、二酸化炭素排出量の抑制など、環境負荷低減の面でも優れており、今後ますます需要が期待できるのではないかと考えております。



ヒマシ油とトウゴマの種

— 高い品質保証・安全供給体制の実現に向けて

1961年（昭和36年）に八尾市に新工場を設立して以来、次々と製油装置や設備の増設を進め、順調に成長を

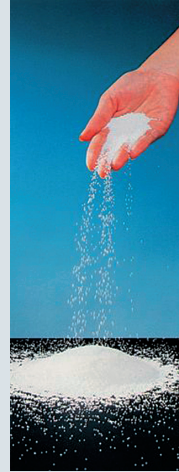
■高い品質を誇る精製工程



ヒマシ油の市場は全世界で9億ドル前後あるといわれており、同社の保有する生産ラインは世界で有数のスケールを誇る。原料の厳選から、圧搾、精製、加工まで一貫した生産システムを有しており、高品質、高純度、高性能を誇るヒマシ油を製造することができる。

■「セバシン酸」の国内トップシェア

同社ではヒマシ油だけではなく、「セバシン酸」というヒマシ油を原料としたファインケミカル素材も手掛けている。ナイロンやプラスチック原料の1つであるセバシン酸においては、独自のノウハウを有しており、国内シェア60%を誇るトップシェアメーカーとなっている。



■ヒマシ油の原産国インド

かつては中国、ブラジル、タイでもヒマシの種が生産されていた。各国の工業化に伴ってインドが台頭し、現在は原料供給のほとんどを同国がおこなっている。西部に位置するグジャラート州ではインドのヒマシ油の種の7割以上が産出されている。



続けていました。ところが、1993年（平成5年）に、大きな災難を経験します。夏季休暇中に本社倉庫で火災が発生しました。火災は油を取り扱う当社の大敵であり、社員の安全や顧客からの信頼を失いかねない、決して起こしてはいけない事故です。当時社長であった私の父は、二度と事故を起こさないことを決意し、製造工程、保管、管理体制を含めた品質保証の国際規格であるISO9000シリーズの取得を目指しました。関西の大手化学メーカーから人材を招き準備を開始し、翌年、日本の植物油脂メーカーとして初めて、ISOを取得しました。



三重工場では設備の新設が進む

現在、当社では八尾工場と三重工場（1997年操業開始）の二極生産体制で供給の安定化を図っています。幸い、お客様からの引合いも多く、その要望に対応するための設備投資も進めています。来年には三重工場に新設備が完成する予定です。これからも、高

品質の商品を安定的に供給できる体制を整えていきたいと思っています。

—社長自らが調達先へ赴く

当社では代々、原料の調達は社長が自ら行っています。ヒマシ油の主要原産国はインドです。インドから搾油した油を液体で輸入し、顧客のニーズに合わせてそれを精製・加工し、提供しています。かつては種ごと輸入し、当社で搾油から精製までおこなっていました。しかし、インドが国策として植物油の搾油を行うようになってからは、現在の方式に変わりました。輸入先のインドへは年に複数回訪問し、現地メーカーの工場視察から、輸入価格・契約の交渉まで行っています。経済発展が進むインドでは、設備投資が盛んにおこなわれており、同じ工場でも、1年でまったく違う姿になることもあります。そういった現地の状況、取引先の信頼性を正しく評価するために、自らの目で見て判断するように心がけています。

—100年企業に向けて

私が社長に就任する前から、売上100億円、従業員100名、創業100年を目指した「チャレンジ100」というスローガンを掲げていました。景気が好調なことに加え、社員達の頑張りが実を結んだことで、売上目標は早々に達

成することができました。現在はさらに150億円を目指して、設備投資を増やしています。また、当社には以前、中国に進出し、撤退をした過去があります。今となっては貴重な経験ですが、今後はこの経験も活かせるよう、売上目標の達成に向けた一つの選択肢として、海外展開も視野に入れていきたいと考えています。



八尾市や消防署から様々な表彰をうける

植物油は大変奥が深い製品です。まったく同じ工程で処理しても、思い通りの品質にならないことがあります。それを顧客の求める規格にあわせて正確に精製する技術こそが当社の強みです。新製品の開発など、新たな分野への展開も必要なことではありますが、引き続き当社の強みであるヒマシ油の精製技術を活かした、当社ならではの事業拡大を追求していきたいと思っています。

—貴重なお話をいただき

誠にありがとうございました